

1559

策謀と欲望

P・D・ジェイムズ

青木久恵訳

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS



DEVICES AND DESIRES

青 木 久 恵
あお き ひさ え

昭和41年早稲田大学文学部英文科卒

英米文学翻訳家

主訳書

「不自然な死体」P・D・ジェイムズ

「死の味（上・下）」P・D・ジェイムズ 他

（以上早川書房刊）

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック版です。

検 印
廃 止

〔策謀と欲望〕

1990年11月10日印刷 1990年11月15日発行

著 者 P・D・ジェイムズ

訳 者 青 木 久 恵

発 行 者 早 川 浩

印 刷 所 岩城印刷株式会社

表紙印刷 株式会社 T K M

表紙製版 ミツミ製版株式会社

製 本 所 株式会社川島製本所

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2ノ2

電話 東京252局3111（大代表）

振替 東京・6-47799

〔乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします〕

ISBN4-15-001559-7 C0297

Printed and bound in Japan

策謀と欲望

P・D・ジェイムズ

青木久恵訳

1559

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS

学院図書館
章

DEVICES AND DESIRES

POCKET MYSTERY BOOK

カワ・ミステリ

J1559-7 C0297 P1400E

少女は必死に走った。最終バスに乗り遅れると、門限に間に合わない。だが、バスは無情にも目の前を走り去っていく。翌朝、少女は死体となって発見された。ノーフォークの連続絞殺魔“ホイッスラー”の4番目の犠牲者だった……。



P・D・ジェイムズ

© Stephen Shakeshaft
arranged through Elaine Greene Ltd.
© Hayakawa Publishing, Inc.

ダルグリッシュ警視長は、亡くなった叔母の遺産を整理するため、休暇をとってノーフォークの海ぞいの寒村を訪れた。青い海を背景に、午後の光を受けて金色に輝く松林や修道院廃墟。そしてその向こうには、ラークソーケン原子力発電所の巨大な灰色の建物が、岬を睥睨するように聳え立っている。この平和な光景に、“ホイッスラー”の影などどこにも感じられない。だが、それはたんなる幻想にすぎず、死の脅威がこの岬にも襲いかかろうとしていることを、ダルグリッシュは知る由もなかった。

現代本格ミステリの頂点に立つ著者が人間の心に巣くう策謀と欲望を重厚な筆致で描きあげた話題の本格巨編。

〈著者紹介〉1920年生まれ。『女の顔を覆え』でデビュー。『ナイチンゲールの屍衣』『黒い塔』『死の味』でCWA賞受賞。他に、女探偵コーデリア・グレイもの『皮膚の下の頭蓋骨』等。

定価 1400円 (本体 1359円)

Hayakawa Publishing, Inc.

P. D. JAMES

策謀と欲望

DEVICES AND DESIRES

P・D・ジェイムズ

青木久恵訳



A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

DEVICES AND DESIRES

by

P. D. JAMES

Copyright © 1989 by

P. D. JAMES

Translated by

HISAE AOKI

First published 1990 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by arrangement

with ELAINE GREENE LTD.

through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

著者のメモ

このストーリーはノーフォーク北東海岸の架空の岬を舞台にしています。イースト・アングリアのこの寂しく魅力的な土地を愛する読者は、クロマーとグレート・ヤーマスの間だろうと見当をつけるでしょうが、同じ地形を見つけることはありませんし、ラクソーケン原子力発電所、リドセット村、ラクソーケンの風車小屋は存在しません。その他の地名は現実にあります、これも架空の人物、出来事を本当らしく見せるために小説家が使う小道具にすぎません。この小説中、現実は過去と未来にだけあります。現在は、登場人物と設定と同様に、著者の想像の世界にのみ存在するのです。

目次

第一章	九月十六日／金曜日～九月二十日／火曜日……………	二
第二章	九月二十二日／木曜日～九月二十三日／金曜日……………	八
第三章	九月二十五日／日曜日……………	一四
第四章	九月二十六日／月曜日……………	二〇
第五章	九月二十七日／火曜日～九月二十九日／木曜日……………	二七
第六章	十月一日／土曜日～十月六日／木曜日……………	三六
エピソード	一月十八日／水曜日……………	四五

策
謀
と
欲
望

登場人物

- アレックス・メイアー……………原子力発電所所長
アリス・メイアー……………アレックスの姉。料理研究家
キャロリン・アムフレット……………アレックスの秘書
ヒラリー・ロバーツ……………管理部長代理
マイルズ・レッシング……………運転管理部長
トビー・グレッドヒル……………物理学者
ジョナサン・リーヴズ……………作業班の副技師
クリスティン
 ・ボールドウィン……………医療物理部の秘書
シャーリー・コールズ……………人事課の職員
ニール・パスコー……………反原発の活動家
エイミー・キャム……………ニールの同居人
ライアン・ブレイン……………画家
テリーザ……………ライアンの娘
メグ・デニス……………旧司祭館の家政婦
ジョージ・ジェイゴ……………パブの主人
ドリス・ジェイゴ……………ジョージの妻
ジョナ……………浮浪者
オリオール・ビーズリー……………アムフレット家の家政婦
テリー・リカーズ……………ノーフォーク警察の主任警部
スチュアート・オリファント……………同部長刑事
ゲーリー・プライス……………同刑事
スーザン・リカーズ……………テリーの妻
アダム・ダルグリッシュ……………ニュー・スコットランド・ヤ
 ードの警視長

第一章

九月十六日／金曜日～九月二十日／火曜日

“ホイッスラー”の四番目の犠牲者は、四人の中で一番若かった。ヴァレリー・ミッachel、十五歳八カ月と四日。イーストヘイヴンからコブズ・マーシュ行き九時四十分発のバスに乗り遅れたのが、原因だった。いつものようにぎりぎりで粘って、ようやくディスコを出た。ヴァレリーがウェインの手を振りほどいて、強烈なビートの中でシャールに向かって来週の手定を怒鳴り、ダンス・フロアを後にした時、急ごしらえのストロボ・ライトの点滅するフロアは、旋回する身体で超満員だった。彼女が最後に見たウェインの顔は回転するライトを浴びて、赤、黄色、青の異様な縞模様をつけ、くそ真面目に上下に揺れていた。靴をはき替える時間を惜しんだヴァレリーは、クローク・ルームに掛けておいたジャケッ

トをひつつかみ、照明の消えた商店街をバス停留所めがけて走った。邪魔なショルダー・バッグが脇腹を叩く。だが角を曲がった瞬間、高い柱の上の電燈に白々と照らしだされて静まり返る停留所が目に入り、戦慄が走った。角まで走ると、すでに丘を半分登ったバスが見えた。バスが信号に引っかかれば、まだチャンスはある。ヴァレリーは華奢なハイヒールをはいた足で、必死でバスの後を追った。しかし信号は青だった。丘を登り切ったバスが、明々と灯を点した船のように丘の向うに沈んで、視界から消えてゆく。脇腹の痛みと身体を二つに折り、あえいだヴァレリーは絶望の目で見つめた。「ねえ、お願い！」ヴァレリーは叫んだ。「ああ、どうしよう！ どうしよう！」怒りと狼狽の涙が目のにじんだ。これでお終いだ。ヴァレリーの家で規則を作るのは父だった。どんなに泣きついて、一度だめなら、絶対にだめだった。繰り返しねだり、延々と議論を重ねたあげく、九時四十分のバスに必ず乗るという条件で、毎週金曜日の夜に開かれる教会の青年会主催のディスコに行ってもいいと許しをもらったのだ。バスは、ヴァレリーの家からほんの五十ヤード先にあるコブズ・マーシュのパブ〈王冠と錨〉の前で止まる。

ヴァレリーの父は十時十五分から、通り側の部屋のカーテンを開け、母と並んでテレビを片目で見ながら、家の前を通るバスに気を配り始める。テレビの番組が何であろうと、天気はどうであろうと、父はコートを着て、娘の姿を視野に置きながら、五十ヤード歩いて迎えに来る。ノーフォーク・ホイツラーの連続殺人が始まって、父の少しばかり専制的な家父長ぶりにまた一つ口実ができた。彼は一人っ子のヴァレリーにはそうするのが一番と考え、また楽しんでやっているらしい。協定は早くからできていた。「お前が父さんの言いつけを守っていれば、父さんもお前の言い分をちゃんと聞かず」ヴァレリーは父を愛していたが、同時に少し恐ろしくもあった。父に怒られるのが怖かった。またいつもの激しい親子喧嘩になる。母の応援を期待できないのはわかってる。ウェインやシャルル、仲間たちとの金曜日の夜も、これでお終いだ。親から子供扱いされるヴァレリーは前々から仲間からかわれ、気の毒がられていた。今度は本当に仲間に顔向けができなくなってしまう。

追いつめられたヴァレリーが最初に考えたのは、タクシーでバスを追いかけることだった。しかしタクシー乗り場がど

こにあるのか知らないし、お金も足りない。足りないのは確かだった。ディスコに戻って、ウェインやシャルルたちからかき集めて借りるという手もあるが、ウェインはいつも文なだし、シャルルはけちんぼだから、ああだこうだ言っとうやく出させた頃には、あとの祭りになっているだろう。

その時、救いが現われた。信号がまた赤になって、四台連なって走っていた最後尾の車がスピードを落として、ゆっくり止まった。ヴァレリーの目の前に開いた左窓が来て、中年配の女性二人が乗っているのが見えた。ヴァレリーは窓ガラスをつかんで、息をはずませて言った。「乗せてもらえませんか。コブズ・マーシュの方角ならどこでもかまいません。バスに乗り遅れちゃったんです。お願いします」

切羽詰まった必死の哀訴もドライバーには通じなかった。前方を見たまま顔をしかめて首を振ると、クラッチを入れた。連れの方がちょっと考え、ヴァレリーの顔を見てから、身体を乗り出して後部ドアを開けた。

「お乗んなさい。早く！ ホールトに行くから、あそこの四つ角でいいんなら、降ろしてあげるわよ」

ヴァレリーがあわてて乗り込むと、車は動きだした。とに

かく方角は合っている。ほんの二秒でヴァレリーは次の行動計画を立てていた。ホールののはずれの四つ角からバスが通っている交差点まで、半マイルもない。そこまで歩いて行けば、〈王冠と錨〉の一つ手前の停留所でバスをつかまえられる。時間はたっぷりある。バスは村から村へ回るので、少なくとも二十分はかかる。

ハンドルを握っている女性が初めて口を利いた。「こんなふうにヒッチハイクするのは、感心しないわね。お母さんは、あなたが出かけていることやしていることを、ご存じなの？ 最近の親は子供のコントロールがまるでできないみたいだから」

私が何をしようと大きなお世話よ、うるさいババアだなあ、とヴァレリーは思った。教師から言われたのなら、我慢しなかっただろう。しかし大人に非難されると思わず口を突く思春期の少女らしい荒っぽい言葉を、ヴァレリーは呑み込んだ。とにかくこの二人のしわくちや婆さんに車に乗せてもらうしかない。ご機嫌をとった方が身のためだ。ヴァレリーは言った。「九時四十分のバスに乗ることになっているんです。ヒッチハイクしたなんて、パパに知られたら、殺されちゃうわ。」

あなたが男の人だったら、乗せてもらいませんでした」「当たり前ですよ。お父さんが厳しくなさるのは、当然だわね。たとえホイッスラーがいなくなっても、若い娘さんにとって物騒なご時世なんだから。で、いったいどこに住んでるの」

「コブズ・マーシュです。でもホールに叔父さんと叔母さんがいるから、四つ角で降ろしてもらえば、あとは叔父さんが送ってくれます。叔父さんの家は、すぐ近くです。あそこで降ろしてもらえば、もう安心なんです、本当に」

嘘はすらすらと出てきて、あっさり受け入れられた。それから誰も口を開かなかった。ヴァレリーは並んだグレーのショート・カットの頭とハンドルを握る老人斑の浮いた手を見つめて坐っていた。外見からして姉妹らしい。最初にちらりと見た時、同じような角張った頭の形と強く張った顎、弓なりの眉毛、いかにも心配症らしい、不機嫌な灰色の目をしていた。喧嘩中らしい、とヴァレリーは思った。二人の間の空気がピリピリ緊張している。無言のまま四つ角で車が止まり、礼の言葉をつぶやきながら大急ぎで車を降りたヴァレリーは、走り去る車を見送って、ホッとした。二人の女性は、